



価値基準のパラダイムシフトに向けて

- 日本感性工学会の現在・過去・未来 -

庄司 裕子*¹ · 椎塚 久雄*²

Aiming at Paradigm Shift of Value Standard

- Present, Past and Future of Japan Society of Kansei Engineering -

Hiroko SHOJI*¹ and Hisao SHIIZUKA*²

Abstract— This document introduces Japan Society of Kansei Engineering (JSKE) established on October 9, 1998. Kansei engineering is a new academic area, and it is a cross-road of interdisciplinary research. In fact, academic members of the society are specialized in such diverse fields as philosophy, education, psychology, art, politics, economy, management, natural science, medicine, physiology, chemistry, materials, mechanical engineering, information, system science, and so forth. In the framework of individual researchers, it is the role of this academic society to offer a place to discuss a common objective of contributing the society by discovering and using values of Kansei based on individual results achieved from their own aspects. This academic society unites a wide range of study areas without being caught in the restriction of conventional categories such as cultural sciences, social sciences, and natural sciences. It promotes a new meta-science and technology of Kansei engineering.

Keywords— Kansei engineering, paradigm shift, value standard

1. はじめに

日本感性工学会は1998年10月9日に設立された若い学会である。同年11月に第1回日本感性工学会大会(会場:文化女子大学)が開催された。それ以後毎年開催されるこの大会は、今年で10回目を数え、本年9月8~10日には第10回日本感性工学会大会(会場:大妻女子大学)が開催され、約1500名の会員を有する当学会は、まさに10年目の節目を迎える年となったのである[1]。

現在、文部科学省の科学研究補助金に関しても、総合・新領域系、総合領域、情報科学・感性情報学として科学研究費が認められており、感性工学の重要性が認識されている結果だと言えよう。奇しくも、今年は経済産業省が「感性価値創造イニシアティブ」を国家戦略として打ち出した[2]。同省では2008年度から2010年度までを「感性価値創造イヤー」と定め、感性価値創造の実現に向け

た施策を重点的に展開している。ものづくりにおいて価値を創造するために感性の解明が不可欠であることが改めて確認されたとも言える。当学会の10周年という節目の年に、「感性」の重要性がフォーカスされていることは感慨深い。

2. 設立の背景

産業革命以来の近代科学技術は、モノを大量に作り出し、人々に物質的な豊かさを提供してきた。人類に多大な恩恵をもたらした一方で、副作用も大きかったことは否めない。画一的な工業製品によって人々の生活は没個性化し、地域の文化も崩壊しつつある。ひいては、人々の創造性をも喪失しかねない状況に直面している。学問分野においても、工学は、新しい技術や機能を実現することで社会に貢献してきた。工学では長い間、新しい技術や高機能を実現することが成果とされてきた。発展途上の社会では、より高機能の製品がより大きな価値を持つモノとして当然のように認知される。しかしながら現在では、物質的な豊かさはすでに十分達成され、高機能な製品が必ずしも人々に求められ、受け入れられるとは限らない。単なる「モノ作り」を超え、人とモノの関わる姿

*¹中央大学理工学部経営システム工学科 東京都文京区春日 1-13-27

*²工学院大学情報学部情報デザイン学科 東京都新宿区西新宿 1-24-2

*¹Chuo University, Kasuga 1-13-27, Bunkyo-ku, Tokyo

*²Kogakuin University, Nishishinjuku 1-24-2, Shinjuku-ku, Tokyo

Received: 17 September 2008, 24 September 2008

を考慮した上で、人々が真に価値を見いだすモノやサービスを提供する必要がある。

モノ中心主義であった 20 世紀に対し、21 世紀はあらゆる意味で人間が主体となり、人間との親和性、自然環境や社会環境との親和性がより豊かな社会生活を営む上で重要視される。人間が豊かさや幸せを感じる時、その感情の源泉となるのが「感性」である。したがって、人間主体の豊かな社会の実現に寄与するためには、人間の感性とは何かについて研究する必要があるだろう。このような背景から、モノ中心主義から脱却し、真に豊かな社会に資するために、人間の根源的な能力としての感性を中心とした科学技術の創成に挑戦するのが「感性工学」であり、種々の相異なるアプローチから同じ目標を目指す研究者のコミュニティが日本感性工学会である。

3. 学際的・横断的なコミュニティ

感性工学は新しい学問であり、分野横断型の学際的研究分野である。実際、現在学会員となっている方々の専門分野は、哲学、教育、心理、芸術、政治、経済、経営、社会などの人文科学系から、医学、生理学、化学、材料、機械、情報、システムなどの自然科学系など多岐にわたっている。当学会は、従来の人文科学、社会科学、自然科学と言った枠にとらわれることなく、幅広い学問領域を融合して、感性工学という新しい科学技術を展開している学会である。個々の研究者の専門領域は違って、感性という価値の発見と活用によって社会に資することを共通の目的としており、多様な研究者が多様な視点から研究した成果をもとに議論する場を提供するのが当学会の役割である。

現在取り組まれている課題としては、感性の計測と定量化に関する手法の開発、感性を活用した哲学の実践、感性豊かな人々を育む教育、美しい風土の実現などを初めとして、揺らぎ・ファジィとソフトコンピューティング・フラクタル・複雑系というような新しい解析手法の導入、情報工学・人間工学・認知科学・心理学・経営学・デザイン学などの諸領域にわたる学際的研究などが挙げられる。さらには、学術的研究成果の事業化への検討や産業化など、既存の工学や境界領域で取り上げにくいテーマに積極的に対応している。

このように、感性工学が学際的・分野横断的な研究分野であることから、当学会では関連研究分野に関わる学術団体との積極的な連携を図っており、「横幹連合」(横断型基幹科学技術研究団体連合)の会員学会としても広くアピールしていきたく考えている。

4. 運営上の特徴

当学会の主な活動としては、学会誌「感性工学」・和文論文誌「日本感性工学会論文誌」、英文論文誌「Kansei

Engineering International」の発行、年次大会、春季大会や講演会等の開催など多岐にわたるが、最も特徴的な点は、研究部会を中心とした組織運営にある。研究部会は、会員で構成され、関心のあるテーマの部会を設けることが可能である。特に、30 名以上で構成される部会からは理事を選出することができる仕組みになっている。現在約 30 以上の研究部会があり、一例を挙げると、あいまいと感性研究部会、感性インタラクション研究部会、感性工房部会、感性事業部会などがある(その他の研究部会名等についての詳細は当学会のホームページ [1]) を参照されたい)。研究部会を中心とした組織運営により、社会の動向や研究の潮流に常にマッチすることを可能にし、学会の活性度を高く維持している。また、多彩な研究部会の連携によるシナジー効果を得ることもできる。

また、産業界で活躍する会員の割合が比較的高いのも当学会の特徴の一つである。研究部会の中にも、学术界だけでなく、産業界で実務に携わる方々が中心となっている部会も少なくない。工学系の学会では、産業界からの参加者や会員にとっての学会の魅力が問題となることが少なくないが、当学会では産業界の方々(特に研究者ではなく実務者)にとっても魅力的なコミュニティとなるよう努力している。

5. 学会が掲げる“感性ジャンプセブン”

冒頭にも述べたように、今年には当学会が設立されて 10 年目にもあたる。その節目にあたり、当学会会長・椎塚久雄の談話として横幹連合ニュースレター (No.012 Jan.2008) [3] にもあるように、当学会が益々発展するためには、まず「感性工学ならではの色を持つ」こと、すなわち差別化を行うことが、最も重要だという考えが示された。そのための一つの方策として、当学会が取り組むべき 7 つの課題を明確にしたものを「感性ジャンプセブン」と呼んでいる。

<感性ジャンプセブンの 7 項目>

- (1) 感性工学ハンドブック(仮称)の刊行(感性工学の体系化への指針)
- (2) 感性工学のコア領域の確立(“工学”とうたうべきか否かの分岐点)
- (3) 感性工学の周辺領域の位置づけ(特に文系領域との連携)
- (4) 感性システムの確立(個別議論からそれをシステム的視点からとらえた統合議論へ)
- (5) 文系と理系の交流を盛んにする感性工学という架け橋の建設(横断型科学技術)
- (6) 感性の定量化技術の促進(科学としての感性《工》学の確立)

(7) ものづくりの現場への応用技術の促進(感性工学のさらなる市民権の獲得)

感性工学は分野横断的であるがゆえに、「感性工学とはこういうものだ」というコンセプトが不明瞭になりがちである。設立初期は、異分野の研究者とのコミュニケーションの場自体が新鮮かつ貴重であったが、10年を経た今、それだけでは不満足な感も否めない。日本感性工学会が活性度を保ったまま維持発展するには、感性工学とはどういうもので、感性工学を研究するにはどういう領域を学ぶべきか(コア領域)といった議論が必要である。これらを明確に定義することは容易ではないが、少なくとも議論をおこない、現状でのコンセプトをハンドブックなどの形で社会に提供していくことが重要である。

6. 工学が“感性”に歩み寄ること

ここまで、日本感性工学会について簡単にご紹介させていただいた。従来、工学の分野では感性より知識が、主観より客観が優先されてきたのに対し、「みんなにとって有用・快適な技術」というのは存在しない、個人の「感性」の問題だと研究者も思い始めた。そして、工学の分野で感性にアプローチする必要性が認識され、当学会の設立に至った。今、この10年を振り返ると、感性工学の重要性はますます大きくなっている。例えば、Webテクノロジーやユビキタスコンピューティングの進展にともなって、個人の個性や感性に適応可能な情報サービスへのニーズが高まっている。また、少子高齢化社会を迎え、快適な福祉機器や介護サービスのためには感性工学的なアプローチが必要である。感性工学会も、今度さらに積極的な活動を展開していく予定である。

感性工学というと、「感性を工学的な手法で扱うことを目指すのだ」というとらえ方をされることが多い。感性を扱うために工学が必要だという考え方である。しかし、むしろ工学の側が感性(を知ること)を必要としているのではないかと思う。工学はもともと人の役に立つことを主眼において、発展してきた学問である。そして今、モノ作り、機能重視の枠組みを維持したまま、人々の役に立ち続けること、人々に価値を感じてもらうことは、難しくなっている。価値基準を変えなければ、工学が評価され続けることは難しい。したがって今、パラダイムシフトのために工学は感性に歩み寄ることが必要なのである。

7. むすびにかえて

感性豊かな人とは、クリエイティブな人である。今、要素技術の開発や革新だけでは、必ずしもクリエイティブな仕事として評価されない。評価されるのは、より上流の人間(ユーザや消費者)に近いコンセプト創生部分である。従来の工学が、ある意味他人任せにしていた部分であるが、これからは、「こんなことが工学になるのか」という領域までカバーしなければクリエイティブな仕事として評価されないのではないだろうか。「感性」はそのための一つの切り口である。感性を知り、工学が21世紀に通用するパラダイムシフトを実現すれば、工学に携わりたいと思う若者を増加させ、理工系離れの問題も解決できる可能性があるかもしれない。手前味噌ではあるが、感性工学には曖昧ではあるが大きな可能性が秘められていると考えている。

感性に関心をお持ちの方は、是非一度、年次大会あるいは春季大会に参加されるか、ご興味の合う研究部会の行事にご参加願いたい。学術研究に携わっている方々も、各種産業界で実務に従事している方々も、また文系系系を問わず、感性工学の発展のためにご参集いただければ幸いです。

参考文献

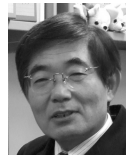
- [1] <http://www.jske.org/> (学会のホームページは近くりニューアルされます)
- [2] <http://www.meti.go.jp/press/20070522001/20070522001.html>
- [3] <http://www.trafst.jp/nl/012/profile.html>

庄司 裕子



1989年東京大学工学部機械工学科卒業。1991年同大学大学院工学系研究科産業機械工学専攻修士課程修了。2002年同大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻博士課程修了。博士(工学)。川村学園女子大学教育学部専任講師、助教を経て、2004年より中央大学理工学部経営システム工学科助教授。2007年准教授。現在に至る。「気づきによる内なる価値創造」ともなう思考プロセスのモデル化とその支援手法に興味を持って研究を行っている。情報処理学会、人工知能学会、日本認知科学会、日本感性工学会各会員。

椎塚 久雄



1973年工学院大学大学院工学研究科電気工学専攻修士課程修了。現在、工学院大学情報学部教授。工学博士。この間、回路構成論、グラフ理論、ベトリネット、システムシミュレーション、ファジ理論、ソフトコンピューティング、感性工学等に関する研究に従事。主な経歴：1990～1992年国際システムダイナミクス学会日本支部理事。1995～1997年日本ファジ学会理事。1997～2001年日本ファジ学会評議員。1999年～日本感性工学会理事。2001～2003年日本ファジ学会副会長。2002～2003年電子情報通信学会コンカレント工学研究専門委員会委員長。2007年10月日本感性工学会会長、現在に至る。